
魔物語

謎人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物語

【Nコード】

N1287L

【作者名】

謎人

【あらすじ】

これは奇妙な物語。厄介事に合う少年、魔法の力を得た少女、足を患うが気丈に生きる少女、万能かもしれない古物商。それぞれの思いがいきつく先は！！

第1話 夜行ブレード1 (前書き)

勢いで書きました

第1話 夜行ブレード1

俺の名前は、岸谷夜行。8歳。男。突然だが、俺の半分は人間じゃない。母さんがデュラハンだからだ。

デュラハンとは、スコットランドからアイルランドを居とする妖精の1種であり 天命が近いものが住む邸宅に、その死期を訪れを告げて回る存在だ。1説では、北欧神話のヴァルキリーが地上に堕ちた姿ともいえるがその辺は母さんもよくわからないそうだ。母さんには首がない。4歳の時それに気付いたが、いまではもう慣れた。俺の周りにはいろいろな怪異が1季節に一回は起きる。良くも悪くも俺の人生に何らかの影響を与えていく。だが、前回の怪異相手に派手に影を使っただのがクラスの何人かにばれたため、いづらくなつた。そこで父さんと、話し会った結果、故郷池袋から結構離れた街海鳴市、私立聖祥小学校に転校、そこで寮でくらすことになったのだが………

「放火~~~~~?」

そう、寮は放火にあつて焼け落ちていた。色々と保証はされるのだが住むとこをなくしたシヨックは大きかった。俺はとにかく、安アパートを捜しに色々と回ってみたが、子供相手に真剣に探してくれる業者はそうそういかなかった。こうして日が暮れ、俺は公園のベンチに座つて黄昏ていた。傍らには俺の相棒の首なしの馬『アムドウキアス(通称アム)』を憑依させた自転車が心配そうにいない。ありがとよ、アム。俺は、アムにまたがり今度は安ホテルを探そうと走ろうとした瞬間、

「あの」

声をかけられた。見ると、車いすに座ったボブのかわいい女の子だった。

「これ落としましたよ」

財布だった。やばくくそして助かったと思い

「ありがとうございます」

礼を言った

「何、悩んでいるんですか？顔がつかれているようやけど？」

俺は、愚痴を交えつつこれまでの事情を話した。すると、

「もしよかったら、うちの家の下宿してもいいで」

これは願ったりかなったりだが、

「いいのか？」

「ええよ」

「助かった。俺は、岸谷夜行。君の名前は？」

「私は、八神はやて。夜君て呼んでもええか？」

「ああ」

そんなやり取りの後、俺は、八神家に居候することになった。

チャットルーム

ストラス（俺のハンドネーム）

「こんばんわー、セットンさんいる？」

セットン

「こんばんわ。寮が放火されたって聞いたが住む場所見つかったか？」

ストラス

「見つかったよ。というか、居候することになった。後でメールで住所と書くから」

セットン

「よかったな。まあ、私もここ最近忙しいからさ、様子見に来れないけどごめんな」

ストラス

「いいよ、じゃ今日はここで、おやすみなさい」

セットン

「おやすみー」

「……………ストラスさんが退出されました……………」

――
――セットンさんが退出されました――
――
――現在チャットルームにはだれもいません――
――

俺が、八神家に居候して一カ月が経とうとしている。今のところ、目立った怪異には出会っていない。もちろん、はやてちゃんには俺が半分人間でないことは話してはいない。恐いのだ。話したい衝動はするが、恐いのだ。

「夜君？どうしたん、そんな思い詰めた顔して？」

「あ、いや、何でもない。今日の夕飯何にしようかなーて考えてただけ」

嘘ではない。俺が居候してからは、日替わりで、料理をしている。まあ、小学生だからな。時間もそれなりに余裕はある。

「そうなん？あんまり深く悩まんでええよ」

「ありがと。明日、足の検査だったよね。泊まりがけ？」

「そうなんよ。ごめんけど、明日のご飯は何作って食べといて」

こうしてたわいなない話をしながら、日曜日は過ぎていった。

翌日、学校にて

今日もやつと終わったな。俺は、帰る準備をしながら、この後街に出かけてみるか（アムに乗って）考えていると、前の席の3人組の女の子の噂話が耳に入った。

「知ってる？ここ最近、切り裂き魔が徘徊してるんだって。日本刀持って斬りかかるんだって」

「そんな情報、どこで仕入れたのアリサちゃん？」

「塾だよ。ここ最近多いらしいよ。なんでも、目撃者によると、犯人の目の色が赤いんだって」

「罪歌？」

俺は母さんに昔聞いたことがあった。一昔前に、池袋で起きた「リップパーナイト」その陰で動いていたのは、罪歌と呼ばれる日本刀だったそう。その特徴は、持ち主が使用する際に、目が赤く変色するそう。

「岸谷君、罪歌って何？」

「ああ、なんか池袋でも一昔前にそういった事件が起きてさ。なんか呪われた日本刀が関わったとか、ないとかっていう噂を昔母さんに聞いたことがあってよ。罪歌って言うのはその日本刀。案外関係してるかもね、じゃ、おれ帰るから」

俺はそう言っただけで教室を出た。近くに止めておいたアムにまたがりいっただけ八神家に帰った。

居候している1室に置いてあるノートパソコンを起動させ、海鳴市の情報、噂話を検索した。もちろん、例の切り裂き魔事件についてだ。被害は、今のところ5件、うち目撃証言があったのは1件のみだ。俺は、とりあえず、最初に事件が起きた神社に向かうことにした。

俺は、なぜか事件に巻き込まれる体質だ。放っておこうにしても呪いのように怪異が降りかかるので、厄介になる前に解決しようと思近しい始めた。神社にたどり着いた瞬間、啞然とした。……何あの巨大な犬？なんか、吠えてるし、飼い主さんも気絶してる。とりあえず助けられないとな。俺は、母さんと同じ形のヘルメットをかぶり、体を陰で覆った。鎧の代りだ。俺は影を操ることはできるが、母さん見たく不死身ではない。俺はアムを走らせ、陰で槍を作り突進した。

先ずは足だ、そう考え槍を払った。だが、巨犬の足が振るわれた。まず、おれは急いでアムの方向を変え今度は顔に向けて技を放った。

「漆黒」

ブワー、槍の穂先の影を広げ、巨犬の顔を覆った。視界を遮られたことで巨犬は暴れだしたが、もう遅い。俺は、思ったのだが、違和感を感じた。巨犬の額から何やら力を感じるのだ。デュラハンとしての能力か？その気の迷いが命取りとなった。

ドコオ

派手に体ごと足で払われ、アムから、落馬した。まずい、おれは焦った。機動力を落としたことは非常に痛い。俺は、それでも陰で槍を作り、突進した。その時、

「大丈夫ですか！」

俺は、固まった。知っている顔だったからだ。高町なのは。俺のクラスメート。啞然としていたが、巨犬の存在があるのでとりあえずもう一度、「漆黑」を放った。

高町のほうもすぐさま杖？を取り出し、桜色の砲撃を放った。

?????????なんで、どうして、とは思ったが、巨犬はひるみそのすきに高町は呪文を唱え始めた。すると、巨犬がみるみると小さくなり元の姿に戻った。見ると青い宝石が浮かんでいる。高町はそれを杖につけている宝石に封印したようだ。すると、

「あの、だいじょうぶですか？」

心配そうに声を掛けてくれた。俺は、携帯電話を取り出し文字を打った。

「大丈夫です。」

俺は、アムに跨ってその場を離れようとした瞬間、

「私、高町なのはっていいいます。あなたのお名前教えてください」

俺は一瞬迷ったが、こう打った

「通りすがりの都市伝説です。」

見せた後、急いでその場所を離れた。ろくに調べることはできなかつたが、仕方がない。

俺は、次の現場に向かうことにした。

結局、空振りだった。ろくに手掛かりなんて落ちてはいないな、時間ももう遅いので、俺は、八神家に帰った。適当に作った夕食を食べ終え、俺はノートパソコンを起動させた。

ストラス

「セットンさんいる？」

セットン

「いるぞ、どうした？まさか、はやてちゃんにアプローチでもかけ

たいのか（笑）」

ストラス

「セットンさん、笑えないジョークはやめてくれ。聞きたいことがある。罪歌について」

セットン

「罪歌がどうかしたのか？」

ストラス

「最近、海鳴市でうわさになっているんだよ。切り裂き事件の犯人が赤い目で日本刀持っているって」

セットン

「罪歌は破壊されたぞ。その現場にいたから間違いはない。まあ、聞いた話じゃあるけど、罪歌は絶えず、「愛してる」って囁きかけるんだ。四六時中ね」

ストラス

「発狂するね」

セットン

「まあな。罪歌本体じゃないとすると、罪歌の子供、もしくは孫になるかな？ だけど、本体壊されたからそうじゃないな。とりあえず、なんかわかったら連絡するから。ところで、ストラス、はやてちゃんとはどこまでいった？ 手はつないだか？ まあ、新羅みたいなまねはするなよ」

ストラス

「しないよ。俺は父さん見たく変態じゃないから。今日はこの辺で。」

おやすみなさい」

セットン

「お休み〜」

――――ストラスさんが退出されました――――

――

――――セットンさんが退出されました――――

――

――――現在チャットルームにはだれもいません――――

――――

まったく、と思いながら俺は寝ることにした。

翌日、俺は体育時間の最中に友人の佐伯元春と火群明王としゃべっていた。たわいもない話だったが、佐伯が

「なあ、知ってるか？最近噂の切り裂き魔、昔池袋でも似たような事件だったそうだよぞつと」

「佐伯、誰からそんな話聞いた？」

「アリサだぞつと」

「発信したのは俺だ。母さんに聞いたことがあってな」

「へえ〜〜〜〜。なら、これは知ってるか？オフィス街の中にある小さな神社。あそこに奉納された刀がなくなっているそうぞつと」

「へえ〜〜〜」

それでこの話は終わったが、俺はそれを調べに行こうと思った。

放課後、俺はアムに跨り、オヒイス街の神社に行った。そこにいると調べてみたが、わかったことは盗まれたのは2週間前、無銘刀だったということだ。俺は、もう調べることはないと思い、八神家に帰宅した。

「おかえり〜〜〜」

帰宅すると、はやてちゃんが先に帰っていたようだ。

「ただいま」

俺はそう言って、しばらく世間話を始めた。しばらくして、

「そういえば知ってる、夜君？ここ最近切り裂き魔事件が起こってるって？」

「そうらしいね、地方紙の一面にも載ってるみたい。病院でもそういう話聞くの？」

構えた瞬間、

ダッ

尋常でないスピードで近づき、袈裟切りを仕掛けてきた。俺は何とか槍で防ぎ、アムを走らせた。騎馬は突進でこそ威力がある。距離をとり、俺は突進しながら、「漆黑」を放った。しかし、

ザシユ

影は跡形もなく、斬られたのだったが、それでも後には引けない。意気よいよく槍で突こうとしたが、

「そんなあなたを愛してる」

ゾク、背筋が震えた。いつの間にか、後ろに座っていたのだ。慌てた俺は、落馬してしまった。まずい、斬られる。俺は、何とか逃げ出そうとしたが、体が震えていた。恐怖、それしかこんな状態をあらわせない。それでも槍を構えようとした瞬間、

「フォットランサー・フルオートファイア」

金色の槍弾が女学生に連射された。何事、と思い上を見ると、長い金髪をツインテールにしたかわいい女の子と赤い犬がいた。

何これ？最近流行ってるの？てか、あの格好恥ずかしくないの？痴少女？

など疑問がわいたが、今はそんなこと気にする場合じゃない。俺は立ち上がって槍を構えて、再び、女学生に突進した。今度の槍は、

て、携帯電話で

「通りすがりの都市伝説です。」

見せた後、急いでその場を脱兎のごとく立ち去った。途中何人にか見られたような気はしたが、この際気にしない。八神家に着いたのは午前4時だった。その日、俺は授業中に何度も居眠りをしてしまった。あの刀が、罪歌であるということはわかった。後日、母さんから日本刀には影打ちと真打ちがあると聞いた。恐らく、あれが罪歌の影打ちだったのではないかと思う。理由は特にない。神社にあった日本刀は無銘だったから思うだけだ。気になると言えば、あの青い宝石だ。あれも、怪異にあてはまるのだろうか？高町についても、金髪の子についてもしかり。俺は当分は、怪異に巻き込まれるなと思いため息をつくのだった。

第1話 夜行ブレード1（後書き）

感想等よろしくお願いします。

第2話 夜行ブレード2

放課後、俺は罪歌についての情報を求め、再びオヒイス街の小さな神社を訪れた。ここで、前日しなかつたデュラハンとしての能力、俗にその土地の神様と話そうと試みた。すると、

「なに用だ？童？今日の早朝もここで暴れておったが」

編みがさをかぶった白髪の老人が賽銭箱のそばに立っていた。おみとうしか、

「俺は、岸谷夜行。父は人間、母はアイルランドの妖精、デュラハン。聞きたいことがあるが、いいですか？」

「ほっ、半人半魔とは珍しいな。まあ、よかろう」

「罪歌につて」

「……あれはもともと、この土地の物ではない。流れ、流れついでこの土地に封印されたものだ。あれを持ってきたのは、変なマスクをかぶった男だったな。確か、名前は・・・岸谷森蔵とかいったかな」

あのくそ爺（怒）、俺は、何とか怒りを抑えて質問をした。

「なぜ封印が解けた。まさか、あの青い宝石が関連しているのか？」

「その通り。いつだったかな。まあ、最近のことだ。いきなりあれは、ここに降ってきおった。今まで、うんともすんとも言わなかつ

た、あの刀、いきなり人の姿になった。わしなんか、目もくれずにさっさと何処かにいつちまたが今日また戻ってきおった。あれの詳しいことは、わしにはわからん」

「そう…ですか」

「お前さんは、なぜ関わるうとする？」

「ほつとけない性格でね」

「難儀じゃな、相当なお人よしか」

「そんなところだ」

「まあ、一つ、いや二つ教えよう。あの刀は、女の姿に変わっておった。それと、××街の に行くといい。もしかしたら、情報が手に入るかもしれん」

「…ありがとうございます」

そう言っつて俺は頭を下げ、賽銭箱に小銭を投げ、神社を出つて言った。

古物商「豊楽堂」教えてもらったところである。俺は、少しばかり迷ったが、入ることにした。

「いらしゃいませ〜〜」

入ると、女学生だろうか？はかま姿の若い女性が声をかけてきた。

「ムム、ねえ、坊や。ここはおもちゃ売り場じゃないけど？」

子供扱いはやめてほしい。まあ、実際子供だがな。世間一般的な環境で育ってきたわけではないので幾分かませているかもしれないが、脱線。

「すみません。とある人に、刀はここでわかるって言われてきたんですけど」

「ムム、その年で銃刀法違反は感心しないよ」

話がかみ合わない、俺はもう帰ろうとしたが、

「まあ、待ちなさい。赤雲ちゃん」

ゲタ帽子をかぶった無精ひげの割と若い男性が奥から出てきた。

「桑原さん」

「刀についてでしたね。今、案内します。事情は、聞いていますから」

そう言って招かれたのは、茶の間だった。

「赤雲ちゃん、お茶とお菓子頼みます」

「了解〜〜」

「さて、先ずお名前を伺いましょうか」

「岸谷夜行」

「岸谷……もしかして、森蔵さんの縁者ですか？」

「くそじ……祖父を知っているのですか？」

「くそ爺っていいかけましたね。まあ、2、3度取引した間柄です。まあ、この話は置いて、刀…罪歌についてですね」

「はい」

「あれは何というか、魂を持った刀、いわゆる妖刀です。あの刀は、持ち主を発狂させて、その体に乗っ取る、それを繰り返す。取り憑かれたら最後、強靱な意志か自分を常に他人のように思う客観することができない限り呪いは続きます」

「すると、今回の被害者も？」

「聞いたところによれば、それはなさそうです。銘ありの罪歌に比べれば、随分おとなしい、いや長い間封印されていたから本来の力を発揮できないか、いずれにせよ、関わるというのであればこれをお渡しします」

そう言って、桑原さんは懐からお札を取り出した。

「まあ、そいつはうちの店長力作の札です。そいつをはっちまえば、封印はできると思います。まあ、破壊の方法は面倒な上整った条件

でちゃんとしないと効果はないんで」

「お待ちどうさま〜〜」

赤雲さんがお茶とどら焼きを持ってきた。

「御苦労さま。それともう一つ、案外塩でも効果はありますよ」

「いろいろありがとうございます。あの、お代の方は？」

「今回に限り、サービスしておきます。口八です。まあ、うちの店を贖肩にしてください」

俺は、茶菓子をいただいた後店を出た。今日は、ひとまず帰るか。

八神家に帰ると、有無を言わず正座をさせられた。理由は簡単、遅くなったからだ。怒ったはやてちゃんからこっぴどく説教を受けた。まあ、仕方がない。こんなに心配してくれるんだ。お叱りが終わり、夕食を食べ、一息ついたところだった。突然、悪寒が走った。何事かとあたりを確認すると、

「よ、よ、夜君・・・」

はやてちゃんが窓を指さしていた。見れば、

「愛してる」

が、それでも女は立ち上がり、刀を振った。一合、二合と斬りあった。まずいな、札は部屋の中だし……

「はやてちゃん、台所から買い置きした塩、あの刀にかけて」

「へ？」

「いいから、早く!!」

とにかく、長期戦は危険だ。つか、持たない。

「夜君!!」

はやてちゃんが塩をぶちまけた。頼む、効いてくれ。見ると動きがぎこちなくなつた。好機。俺は、刀についていた青い宝石をたたき落とした。そのとたん、女は消え、刀のみが残った。刀は再び、

「愛してる、だけど私には力が足りない。もう一度来るわ」

そう言つて、刀は浮遊し出て行つた。しばらく唾然としていたが、はやてちゃんの視線で我に返つた。話そう、そして……
部屋の片づけが終わり、俺ははやてちゃんに事情を話した。拒絶される覚悟で臨んだ。

「……………というわけだ。まあ、普通に話してもこんな突拍子もないこと信じられないだろうから……ごめん」

「……………」

「怖い思いさせてごめん。すぐに出て……」

「行かんで…」

小さく、か細い声が聞こえた。

「だけど、

「行かんで……もう一人ぼっちはいやなんや」

「俺は、半分人じゃない。半端なく、事件体質でこの上なくおせっ
かいだぞ」

「それでもいい。夜君は夜君やろ」

俺は、なぜか泣いていた。はやてちゃんも泣いていた。この晩の出
来事は、色あせることなくいつまでも覚えていたかった。

翌日の放課後、俺は、古物商「豊楽堂」へと向かった。はやてちゃんも一緒に来た。

「いらしゃいませ〜〜。おや、岸蟹君だったけ？」

「俺の名前は、岸谷です。なんですか、その新種の蟹は？」

「失礼、噛みました」

まあ、いいか

「赤雲さんでしたっけ？桑原さんはいらしゃいますか？」

「桑原さん？ごめんね、桑原さんこの店の番頭の仕事上、出張とか多いから今日はいないよ。何なら店長呼ぼうか？怪異がらみのことでしょ」

「怪異というか。昨日、罪歌が襲ってきました。この子の家に。狙いは、俺でしたが、この先のことが不安で」

「ほほう、その歳で同棲とは。やりますね」

「話変わってませんか？」

「夜君、話のペース完全にあの人の人に移ってる」

「失礼。まあ、桑原さん以上にうちの店長は頼りになるから、菊裏さん~~~~~」

「聞こえてるわよ~~~~、赤雲~~~~」

奥から、漆黒の長い髪をたらしただライナドレスの妙齡の女性が現れた。いろいろ変った人多いなここ。

「あなたが桑原が言った、あの首なしライダーの息子ね」

そこまでいってないぞ

「まあ、たいていの情報は、D・D社から買っているから裏も表も中間も狭間のことは大半わかってるからそう身がまえなくてもいいわよ。赤雲、カルヴァトス用意して、この子たちにはお茶がカルピス用意しなさい。菓子は任せるわ」

「はいは~~~~い。岸谷君、えと」

「八神です。八神はやてです」

「はやてちゃんは何にする~~~~?」

「お茶で」

「カルピスで」

「了解~~~~」

案内されたのは昨日とは違う部屋だった。中華風の造りをしていた。

「さて、「」用件は？」

「昨日、罪歌が襲撃を掛けてきました。幸い退けたんですが、次どうなるか分からないので、えと…」

「つまり、その子の身の安全を得られないか？といったところかしら」

「まあ、だいたいあってます」

「……あるにはあるわ。だけど、うちも商売でやっているから、それなりの対価はいただくわ」

「物々交換でも？」

「中身によるわ」

俺はカバンから瓶を取り出した。中には、俺の影で覆った青い宝石が入っている。

「罪歌についていたものですが」

「多すぎるわね」

「えっ？」

「その宝石は、ジュエルシードといってね。莫大な魔力を保有してるわ。魔道関係者、特に時空管理局なんかは、目の色変えてでもほしいがる一品よ」

当然出てきた謎の単語、はやてちゃんもちんぷんかんぷんといった表情をしていた。

「まあ、いずれわかることよ。しかし困ったわね」

「あの、多すぎるってことなら、貸しにすることはできるんですか？」

「……それでいいの？」

「ひとまずは」

「そう」

そう言って、菊裏さんは柵から銀色の五行星のペンダント取りだしをばやてちゃんの首にかけた。

「それは、半径一キロ以内なら敵意ある怪異やアヤカシ類から護る結果よ。壊さない限り効果はあるから安心はしていいわ」

「ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

「あれ〜〜、もう終わっただんですか〜〜〜？」

「いえ、いいタイミングよ。赤雲」

こうしてお茶会（まあ、菊裏さんは酒であるが）を済ませ、俺たち

は豊楽堂を後にした。
続く足で、近所の商店街にて、買い物をした。

「合計で1450円か、500円で一回だからあと50円でもう一回福引き・・・」

「夜君」

「いえ、何でもないです」

はやてちゃんの残機は0だ。まあ、昨日の今日だ。おとなしくしておこう。

「窓ガラスの修理費もあるし、あんまり無駄遣いはしたくないんよ。…あ、山萩パンのお皿のシールが今日でたまるん・・・」

あと、1ポイント足りなかったようだ。期限も残っていない。

「夜君、アンパン食べる？」

「まあ、いいけど」

そんな会話をした後、会計を済ませ福引き会場にやってきた。

一回目、白10等ポケティ

二回目、

「青3等賞あたりました~~~~~」

「はやてちゃんすごいー!!」

「え、え」

「3等賞ていったら・・・」

1 / 1 阿修羅像

誰だ、あんなもの景品にしようて言ったのは？重すぎるので後日、送ってもらうことにした。そして最後、

「銀2等賞、海鳴温泉ペア泊二日御招待券当たり~~~~~」

2等賞をもらいました。

第2話 夜行ブレード2（後書き）

拙いですが、よろしくお願ひします。

第3話 夜行ブレード3（前書き）

設定

岸谷夜行

誕生日 9月

容貌 顔はセルティ似（女顔） 後ろ髪の毛を一部のばしている

能力 新羅に習った医術（応急処置） セルティから受け継いだ影能力

性格 事件体質のせいか多少ゆがんだ性格 また異常な？夫婦を見て育ってきたためかどことなく冷めて突っ込み体質およびませ気味
自分が人間なのか、デュラハンなのか悩むこともある

特技 ネット

第3話 夜行ブレード3

チャカポコ、チャカポコ

馬の歩みに合わせて、一台の馬車が道をゆく。しかし、その馬車にはシルエットしか存在していない。

「案外、作れるものだね」

「夜君、やっぱり、馬車って目立つんじゃないよ・・・」

「馬は自転車と同じ扱いだから大丈夫？のはずだよ。それにこんな山中にパトロールに来る警察もいないと思うし」

俺たちは、連休を利用して商店街で当たった賞品券で海鳴温泉にちよつとした小旅行に向かった。昔、父さんから母さんとのハネムーン？の惚気話を思い出し、頑張つて馬車を作ってみた。案外うまくいった。念のために、アムにも頭部鎧をつけ、こうして出かけた。途中、追い抜く車の人がぎよとしていたが、まあいいだろう。そんなこんなで、宿に着いた。

受付を済ませ、指定された部屋に向かった。そこで荷物を置き

「はやてちゃん、どうする」

「そつやね。一緒にお風呂はいるっか」

難易度高いよ。まあ、たまに一緒に入ることもあるけど、俺の場合幾分ませてるからね。

はやてちゃんより誕生日遅いけど、 e t c , e t c

「夜君？」

「はやてちゃん、俺はちょっと・・・」

やばい、上目づかい・・・どうにでもなれだ。

「わかった、入ろう」

「うん」

かほ~~~~~ん

まあ、入ったわけだ。満10歳未満はどちらでも入ってよい無情にも書かれていた。幸い、俺とはやてちゃん以外誰もいない。僥倖だ。あれこの意味ってこう使うだけ？など軽く混乱していた時、

「広~~~~い」

知ってる声だった。俺は、油の切れたロボットのようになぎざちと入口の方を見た。

見なきゃよかった。そこには、高町、バニングス、月村、あとの二人の女性は、お姉さんか？それと高町のペットらしきフェレット？がいた。

「岸谷君？」

さっそくばれた。

「キグウダナ」

「なんでカタカナになってんのよ？」

「夜君、お知り合い？」

「ああ、クラスメート」

そこで、ガヤガヤとしゃべっていたが、のぼせてきたか、高町たちにはやてちゃんを任せ、先に上がった。

「偶然つてあるもんだな」

俺は、マッサージチェアにもたれ、コーヒー牛乳を飲みながら一人ごついた。

「岸谷さんじゃないですか」

「あれ、桑原さんつと・・・？」

見ると、ゲタ帽子をかぶった桑原さんとスーツ姿の異様な雰囲気のおじさんがいた。

「ああ、初対面でしたね。彼は、うちの取引先相手です」

「ロニー・スキアートだ。ふむ、君がセルティ・ストウルルソン嬢の息子か。なるほど、よく似ている」

「ところで、岸谷さん。罪歌とはじめて戦った時、一人でしたか？」

「いえ、途中で金髪の女の子と・・・ああ、あそこにいるお姉さんに似た・・・」

「ブハアー、コーヒー牛乳を吐き出した。お姉さんもそれに気づいたらしく」

「なんだい、人の顔見て吐き出すなんて？」

と寄ってきた。

「いえ、すいません。わざとじゃないんです。鼻にいったとゆうか・・・」

「そうかい。気をつけなさいね」

そう言って去って行った。

「大丈夫ですか？」

桑原さんが心配そうに声をかけた。

「大丈夫です。にしても似たような人っているもんですね。犬耳あったら、完全に本人だったのに」

「そうですか」

「それにしてもなんで、俺なんか狙うんでしょうかね？母さんは罪歌にえらく嫌われていると聞いたんですが」

「おそらく、ジュエルシードです。本来、魔力と妖力は似て異なる存在。この街の罪歌は魔力を帯びた際に嗜好も変わったんじゃないですかね。それと、同じ刀工が作ったといえど完璧に同じ存在ではないですからね」

「そんなもんですかね」

その後、高町たちとしゃべったり、卓球をしたりして過ごした。はやてちゃんもなんだか楽しそうだったのでうれしかった。

夜

ぱちりと目を覚ました。気配がする。今度こそ決着をつける。俺はお札と塩を持ち、影をまとった。はやてちゃんが起きないように気をつけ、俺は外に飛びたした瞬間、

「高町？」

クラスメートが外に出ていた。なんで、どうして？とは思ったが、罪歌のことがあったので、とりあえずスルーした。止めてあったアムに跨り、ヘルメットをかぶり、影槍をもち、走った。森の中に入ったので、アムを馬の状態にし、気配がするほうに走った。だが一向に姿を現さない。どこだ、どこにいる。

俺は走っているうちに、小川に差し掛かった。ん・・・あれ？集中して気配を探り、ジュエルシードと呼ばれる宝石を見つけた。気配

を放っていたのはこれか？と疑問に思っていた瞬間、

ガス

拳がかすった。見ると、昏間あつたお姉さんが犬耳つけて殴りかかってきた。落馬したものの、俺は、なんとかかわし続けたが、いかせん足場が悪い。反撃しづらかった。刹那、金色の縄で体が巻かれた。上を見ると、先日会った金髪の娘がたたずんでいた。

「その石を渡してください」

少女は、言った。だが間がいいんだか悪いんだか、反対側から、

「やっと見つけた、あれ？」

高町が現れた。さらに、本命の

「愛してる」

罪歌（人）が現れ、なぜか、

「ふむ、妙な気配はこのところ感じてはいたが、まあいい」

ロニーさんが意味深なことを言いながら現れた。何、このカオスな空間？バツカーノ？大騒ぎ？e t c , e t c . . . などとかなり困惑していたが、最初に動いたのは、罪歌で

「悪魔には興味がないわ」

と言い去って行った。おいい~~~~~~~~。あきらめ良すぎ

だろ。もっと、頑張れよ。

「ふむ、妖刀か。ああ、君が追っていたのか。すまないね」

ロニーさんはそこでいったん言葉を区切り、

「まあ、何やら状況は混沌としているようだ」

言い終わった瞬間、空気が変わった。先ほどまでは只者ではないという気配だったのが、変わった。

彼は「存在」だった。何かはわからない。だが、自分や母さんとは違う存在だった。

その異様さに圧倒されたか、彼女たちも動かなかった。いや、動けないと言った方がいいだろうか。構わず、ロニーさんが

「その金髪の君。彼を離してはやってくれないだろうか。まあ、彼と私はその石に関しては部外者だからね。おとなしく引くとしよう。ただし、この世界をどうこうするのであれば私は持てる力をすべてをもって、対処させていただく」

有無を言わさない言葉だった。彼女は、震えていたがやがて俺を縛っていたバインドを外した。すかさず、俺は真上にジュエルシールドを投げ、アムに跨った。そして一目散に逃走した。

旅館に着くとやっぱりというか、ロニーさんが待っていた。俺はヘルメットを外した。

「ふむ、以前彼女に出会った時も、君と同じヘルメットをかぶっていたが・・・」

「まあ、真似事みたいなものですよ。まあ、母さんは鎌を使用しますが、俺は槍を使っていますからね。……聞いていいですか？」

「答えられる内容ならな」

「あの金髪の子や高町は何者なんですか？いや、素性とかそういうんじゃない」

「まあ、ひとことと言うのであれば、魔導師だ。君や私とは違った力を持つものだ。これ以上は、君自身が調べてくれ。私は、あまり未来を知りたくはないからな。面白くなるからな。……まあ、しばらくはこの街にいるかな。相談くらいは聞こう」

そう言って、ロニーさんは旅館に戻った。俺も後に続き、はやてちゃんに気付かれないうちに部屋に戻り、そのまま眠った。

第3話 夜行ブレード3 (後書き)

キャラの口調がおかしいかもしれません(特にロニーさんが)

感想、ご意見よろしくお願いします。

第4話 夜行ブレード4 (前書き)

日常編です。

第4話 夜行ブレード4

進まない。そう、罪歌についての調査が全然進まないのだ。あの温泉宿の件以来まったく言っていないほど切り裂き事件は起こっておらず、徐々に忘れ去られようとしていた。

う~~~~~む？俺は唸っていた。ここで、貸しにしている対価で情報を得るべきか、この街のどこかにいるロニーさんを探すか、ジュエルシードを探すのも一手だな、しかし、こつちもまったく言っていないほど情報がない。いや、あるな。今言い争いしている高町をつければある……言い争い？俺は、考え事をやめ仲裁に入っ

た。

「おいおい、何言い争ってるかは知らないが、熱くなりすぎだ。バニングス。いったい何があった？」

「部外者は口出さないで。そんなに私たちと話すのが退屈なら一人でポーとしてなさい！！行くよ・・すずか」

そう言っただけでバニングスは教室を出て行った。月村も高町にことわって、出て行った。

「……何があったかは知らないけど、悩み事は一人で抱えるもんじやないぞ」

「うん。ありがとう。岸谷君。大丈夫だから」

あんまり大丈夫そうな顔はしていないがな。まあ、突っ込むのも面倒なので俺はその場を去った。

さて、高町はあんな様子だしな。あんまり遅くなるとはやてちゃん
が心配するからな。今日のところはかえろ…う…。すごい人だ。俺
は、改めて世界は美しいかどうかは知らないが、広いことを実感し
た。その人は、赤い眼球にイルカの歯並び、歩く姿は吸血鬼だから
だ。俺がじつと見ていると、視線に気づいたらしく、近づいてきた。

「ねえ、君さあ、この辺りに詳しいかい？」

「まあ、大抵は」

「翠屋つて喫茶店どこにあるか知らないかい？ここのケーキがおい
しいって今の仕事の同僚が言ってるさ」

「ああ、案内しましょうか」

俺は、店自体は入ったことはなかったが場所くらいなら知っていた。
いい機会だ。そこでケーキでも買ってみるか。

「よろしく頼むよ」

赤い吸血鬼はニカッと笑った。あ、全部の歯、犬歯なんだ。

喫茶店へ翠屋へおいしいと評判だ。店内に入ると

「いらしゃい…」

マスターだろう男性がこちらを凝視した。

「あれれれ？あれあれあれえ？土郎じゃないか。こんなところで会えるなんて大自然の導きってやつ？」

「クリス、クリストファーか！！」

あれ、知り合い？

「ひさしぶりだね〜〜。なに、最後に会ったのは10年ぐらい前だっけ？そうそう、人づてに聞いたんだけどさ。なんか大けがで死にかけてたんだって。大丈夫かい？」

「この通り大丈夫さ。お前の方は、相変わらず護衛暮らしか？」

「そんなもんさ。立ち話もなんだし、注文していいかい？」

「すまないな」

ここで話は一旦終え、あいている席に座った。

「そういえば君は、この前温泉に来ていたなのはのクラスメートだっただけ？」

「そうです。岸谷 夜行です」

「なのは？へえ、土郎、子供が出来てたんだね。そうすると、結婚もしてるのかい？いや〜時がたつのは早いもんだね。」

「そうだな。クリス。しかし、わかっているとは言えお前はかわらないな・・・」

「そう？この間、髪切ったんだけど」

「そういうところはかわっていないな」

やがて、注文したケーキが届き俺とクリスマスさんは食べた。

「今日はいいい日だ。大自然に感謝したいよ。君の分までおこっ
げる」

「いいんですか？」

「いいさ。それよか気になるんだけどさ、君人間？」

何この人？確かに俺は、半分人間じゃないけどさ。

「おいおい、クリス。何言っているんだ？」

「いや、何でもないよ。ちょっと僕と近いにおいがしてさ。ごめん
ね」

「いえ、気になさらず」

そう言っつて、お土産のケーキ（イチゴのショートケーキ）をもち俺
は家路に着いた。

八神家に帰ると、はやてちゃんが仏の顔で待っていた。まずい、あ
の顔は、残機が少ない。いつもなら必死で弁明するが、この日は切
り札がある。切り札があつてよかった。少なくとも、夕食がわびし
くはなりそうにはないな。はやてちゃんが夕食を作っている最中に、

俺は台所以外の場所を掃除していた。はやてちゃんの部屋には何回か入ったことはあるがそのたびに気になっていたことが一つある。鎖に巻かれてある本だ。タイトルも書かれてはいない。夕食の時、聞いてみた。

「いつからかは、よくわからんけど、私が物心ついた時にはあつたような気がする。まあ、使い道ないからインテリアとしておいてはいるんやけど・・・」

「なるほど。まあ、あれには悪意や敵意はないと思うしね」

「なんで?」

「その首飾り」

「ああ」

納得したらしい。この結界がある以上は怪異がらみのことにははやてちゃんには振ってこないだろう。少なくとも俺はこの時点ではそう思っていた。

Sideなのは 時は放課後

なんでかな?あの温泉地での戦い・・・

フェイトちゃんとの戦いの日から数日がたったの…

今でもずっと考えているの・・・

きつと私と同じ年くらいで、深くてきれいな目をしたあの子のことを・・・

あえばまたぶつかり合うことになる・・・

考えすぎて、アリサちゃんに怒られちゃった・・・そんなに親しくない岸谷君までに心配されちゃって・・・

「なのは」

心配そうに見上げるユーノ君

大丈夫だよと言おうとした時、気配がしたほんの僅かに・・・ジュエルシードの気配が・・・どこだろうあたりを見回すと、

「あそこから？」

そこは、古物商「豊楽堂」という場所だった。半信半疑でその店に入ってみることにした。

「いらしゃいませ~~~~~」

入るとすぐに店員さん？（はかまを着た）らしき人が声をかけた。

「むむ、お嬢ちゃん。ここは、おもちゃ屋や小物店とは違ってお嬢ちゃんが気にいるような品物は少ないよ？」

「あの、ここに青い宝石なんか置いてありますか？」

「青い宝石・・・ひょっとして、ジュエルシード？」

「！！知っているんですか？」

「まあね、てことは君が発見者なのかな、フェレット君？」

ユーノ君に気がついた！この人何者？

「そんなに驚かなくてもいいよ。ここじゃなんだし奥に上がってく？事情くらいは聞いてもいいよ。今日は、その手の取引ができなくてね。菊裏さんも桑原さんもいなくてさ。丁稚のあたしにはどうこう出来ないし」

私はとりあえず、奥にお邪魔させてもらうことにした。

案内されたのは、ちよつと変わった和室。調度品や小物がちよつと変ったお部屋です。

「お茶入れるから、ちよつと待ってて。あ、フェレット君さあ、元の姿に戻っていいよ」

さらつとそんなことを言われた。ユーノ君？と思っていると、ユーノ君の姿が光りだしフェレットから私と同年くらいの男の子の姿になった。ふえええええ！！

「ふう。あれ、なのは。僕たちが初めて会った時、僕この姿じゃ？」

「ち・・・違う違う。最初からフェレットだったよ！！」

「え……ああ、そういえばそうだったね」

「ほほう。その歳で、同棲とはやりますね」

いつの間にか戻ってきたお姉さんがニタニタして戻ってきました。

「あ、そうそう。君たちの名前、教えてもらえるかな？あたしは、
しなずがわ不死川 せきな赤隼」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「ユーノ君。これだけは言っておくよ。あんまり、フェレット姿と若さをいいことにはじけすぎないでね。お風呂のぞくとか」

「ブハア、ユーノ君はその言葉に反応したのか盛大に吹きだしました。あ、そういえば私ユーノ君の前で・・・」

「な、何言ってるんですか！！ちょ、なのは。どうしたのそんなに顔真っ赤にさせて」

「ははははは。何か心あたりでもあるのかなははははは？」

「ちょ、やめてください。とりあえず、ジュエルシードの件なんです
すが」

「あはははは。まあ、さっきも言ったとおり、あたしは丁稚だからさ。ロスト・ロギア関連については関与できないからね。ま

あ、ほしいって言うならそれなりの対価が必要だよ」

「でも、あれは・・・」

「発見者は君ってことはわかるけどさ、あたしらも商売だからさ、せめて名前でも書いとくんだったね。まあ、予約は入れといてあげるから。ところで……なのはちゃんにか悩みごとでもあるの？」

「ふえ？なんでわかつたんですか？」

「ありゃ、凶星」

私は、赤凩さんに話してみることにした。フェイトちゃんのこと、自分のことを……

「いや〜〜、青春してるね〜〜」

パク、と大福を食べながら赤凩さんは言った。

「まあ、解決するのはなのはちゃんだからね。どんな選択でも自分で選んだ結果ならそれをなのはちゃん自身が後悔しないようにするのがベストなんじゃないかな？」

「私が選ぶ選択？」

「そ、あきらめて逃げるのもよし。ユーノ君に投げっぱにするのもよし。逃げずに頑張ってみるのもよし。選択肢はたくさんある。まあ、蛇足だとは思うけど、結ばれた縁は消えないと思うんだ。なのはちゃんがユーノ君に会ったのも、そのフェイトちゃんと会ったこ

ともきつと何かの縁だと思っただ」

「何かの縁……」

「ま、ほとんど、菊裏さんの受け売りだけどさ、自分自身がどうしたいかってのを考えるのもいいんじゃないかな？」

「…ありがとうございます。まだ、よくは整理できてないけれども話ためになりました」

「いってことよ。あ、なんなら、うちのお店彙戻してね」

お茶を飲み終わった後、私は店を後にしました。

「ユーノ君」

「なに、なのは？」

「私が見、ジュエルシードを集めるのはユーノ君のお手伝いのつもりだったけれど、さっきの赤雲さんのお話を聞いてね、私は、後悔はしたくない。ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降りかかったらいやだから、そう思ったの」

「……………」

「ちょっと、ませてるのかな？」

「そんなことないよ」

「だからね、これからもよろしくね、ユーノ君」

「ええと、こちらこそ」

「それはそうと、ユーノ君。なんで今まで、人の姿に戻らなかったのかな？」

「え、えと何かとフレットの方が都合が」

「どういう意味で都合がよかったのかな？」

この日、あの人とは違う悪魔に出会った。のちにユーノはそう語った。

S i d e 夜行

さて、どうするか。おれは思案した。やっぱり、豊楽堂に行くか。そう決めた。そろそろ寝ようかと思った時、

トントン

ノックがした。

「どうしたの？はやてちゃん」

「夜君、こんなん言うのもいやけど、危険なことせんで」

「…ごめん。俺さあ、一度関わると抜けだせなくなるんだよ。俺は怪異からは逃れられない」

「なんで？夜君だけ？」

「確証はないけど、原因はこの首だ」

パン、と首をたたきながら、自嘲しながら言った。

「デユラハンは死を司る。その影響かなんかで争いを呼ぶ。ま、俺の場合は半人半魔だから知らないけど、自分自身に降りかかっているけどね」

そう、笑い話ではないのだが、過去にいろんな怪異に遭遇した。自転車に乗った包帯男、おっさんの顔を持った犬、重みを奪う蟹など、1季節に1回は何か遭遇している。もはや、呪いの域だ。

「……夜君は、つらくないん？」

「まあ、正直言うつらいかな。だけど、母さんのことは尊敬してるからさ、何というか、この血を否定することは母さんを否定することになるかもしれない」

一瞬目が鋭くなったような気がした。はやてちゃんがそれに驚いて目を潤ませた。

「じめん」

俺は、後悔した。彼女は優しい。それが、嬉しい。だけど、今までの怪異は決して、無駄ではないと思う。そう思わなければ、俺は、自分自身がなんなのかさえ分からなくなるのだから

「夜君、お願いがあるんやけど」

「なに?」

「怪我はせんでね」

「約束する」

「じゃ、指切りしよ」

「・・・わかった」

「ゆびきりげんまん嘘ついたら、女装させる。ゆびきった」

「・・・はい?女装?」

「はやてちゃん?何、女装って?」

「いや〜、こつ言ちゃ悪いけど、夜君男の子なのに、かわいい顔してるから」

そんな、笑顔でそう言わないで。結構気にしてるから。母さんなんて、小さい頃、女物の洋服フリフリを着せようとしてたから。俺が本気で落ち込んでると、

「ごめん、ごめん。けど、夜君」

「わかってるよ、約束する」

そう、俺は決めた。この子には、笑顔でいてほしい。そう心に誓った。

第4話 夜行ブレード4（後書き）

遅くなりました。

第5話 夜行ブレード5（前書き）

首なしの騎士の息子は、刀を封じに公園へ。

新米魔導師は、ジュエルシードを封じに公園へ。

異世界の魔導師も、ジュエルシードを求め、公園へ。

吸血鬼は、同僚を探しに公園へ。

管理局は、異変を調査に公園へ。

妖刀は、愛するために公園へ。

さあ、バツカーノ（大騒ぎ）をはじめよう。

第5話 夜行ブレード5

さて、今日も終わったな。俺は、さっそくこっそり止めたアムに跨り、古物商「豊楽堂」に向かった。

「いらっしやいませ〜〜〜。おや、岸橋君だっけ？」

「赤雲さん、俺の名前は岸谷です。橋じゃありません」

「失礼噛みました。」

「わざとですね？」

「かみはみま」

「わざとじゃない!!!!」

「神は見た」

「確かに、俺はデュラハンの血を半分引いてますけど」

「ところで、岸谷君。何か御用？」

「貸しにしている対価で、罪歌の情報を」

「・・・OK。今から、菊裏さん呼ぶから」

「いるわよ、赤雲」

みると、和服を着た菊裏さんが現れた。その隣には、ロニーさんがいた。

「こ、こんにちは」

「まあ、そう硬くならなくてもいいさ」

「あなた相手に普通に接することなんてマルチイージョファミリートのマイザーとあの笑顔スマイルジャンキー中毒者と中二病の変態実験者くらいじゃないかしら?」

「ふ、違くない」

おおい~~~~い、いま、ファミリってなにギャング?マヒイア?

「カモツラだ」

なんですか?心読めるんですか?

「からかいがあるな君は」

「話を戻すわ。罪歌は非常に混沌しているわ。妖力と魔力は似て異なるもの。罪歌は、魔力を欲している。また同時に、妖力を欲している。あなたは、どちらとも持つてるわ。もっとも、魔力は制御されてないけれど」

魔力?俺が?

「手頃の魔力の媒体はジュエルシールドよ。封印する前のがいいわ」

「てことは、高町たちより早く見つけないといけないわけだ」

「そうね。罪歌もジュエルシードを媒介にして体を作っているわ。ジュエルシードの魔力で呼び出すのがベストね。位置は、そうね、ロー」

「ふ、仕方ないな。未来のことはあんまり知らないようにしているが、商談となれば・・・まあいい」

「対価は支払うわ」

「ふむ、夕方頃に海沿いの公園に現れるだろう。少年、頑張れよ」

「ありがとうございます」

俺は、そう言って豊楽堂を去った。

S i d e クリstoffアー

いや〜〜、暇だね。ここ最近軽い体操ばかりだしね〜。七〇年前の方が楽しかったかな？いやいや、最近でもそこそこ楽しめる相手がいるしね。あの紳士の子爵もいることだし、退屈はしないかな。

「クリスマスさん!!」

やれやれ、

「なにかな？忍」

「あのね、雇用主に対する態度をもう少し改めるべきじゃない」

「あゝはいはい」

ギロ、

「冗談だよ。アメリカ出身なだけに」

「まあ、そういうことにしましょう」

「それで、何かあったのかい？」

「そうそう、ファリンがなかなか帰ってこないから、ちょっと様子見てもらえるかしら？」

「あの子かい？それは心配だね。最近は聞かなくなったけど、ここいらで切り裂き事件も起きてるしね。行ってくるよ」

Side 夜行

さて、6時20分か。俺は、猫耳ヘルメットをかぶり影でいつもの装備を用意し、異変を待った。どこだ。ドクン。

見つけた……なんだよ、あの木の怪物。いまどきのRPGにもでてくるけどさ。一気に決めるぜ。

俺の意図を読んだのか。アムは嘶き、駆け出した。

全力でかけてくる俺たちに対し、怪物は根っこで払おうとしたが無駄だ。アムは縦横無尽に駆け巡りそして一気に近づき、槍で払った。そして、

ザシュ

怪物もバリアっぽい何かで対抗しようとしていたが、間に合わなかったようだ。そのまま霧となり、ジュエルシードが残った。とりあえず、これで、

ん、周りの景色が？

「ジュエルシードを渡してください」「」

見ると、高町と金髪の美少女が空に浮かんで同時に叫んでいた。

無視するわけにもいかないので、携帯で

「事情が変わった。今からこいつを使う」

と見せ、間髪いれずに発動させた。キーーーーーー

ーーーーと、奇妙な音が鳴った後、あれは現れた。

「愛してる」

いつか見た、白拍子の姿。片手には刀。そして、

「ジュエルシード」「」

「時空管理局だ、武器を下してもらおうか」

と第4者が現れた。あ~~~~、もう。どうにでもなれ。次に大王イカが現れてももう驚かんわ！とりあえず俺は、その辺の罪歌の子供たちを倒すことにした、

ザシユ、ザシユ

槍を軽快に払い、数を減らした。

S i d e クリス

物足りないね。それが感想だ。銃剣使うまでもない。人じゃなさそうだから、おもいつきり殺せるんだけど、足りないね、スリルが遅いし、簡単に崩れるし。それにしても世界は広いね~~~~。

あの槍を使ってる少年、アデルといい勝負になるんじゃないかな？女の子にしてもそうだ。片方の金髪の子はあの黒い少年が現れた後、赤いワンちゃんと一緒に逃げたけど、空飛んでるし。もう一人の方も、杖からなんか波動砲みたいなものだして確実に数を減らしてる。あれ、あの子誰かに？あと黒い男の子も同じように砲撃してるし、どういう仕組みなのかなあれ？.....ま、いいや。さっさと、終わらせて、ファリンを探そうか。今日の夕食はなにな~~~~？

S i d e 夜行

さてあらかたは片付いたな。やっと、罪歌を相手にでき.....ガキンス、何とか体勢を立て直し、槍を罪歌に向けた。そして、

ガキンと鏢迫り合いとなったが、

フォ、と罪歌相手に手刀が放たれた。

「隙あり？」

クリスさんが笑顔で言った。罪歌が転んだその隙を突き、札を貼ろうとしたが、

罪歌は体を捻り避け、無防備の俺にカウンターを仕掛けた。ヤバ！
！と思った瞬間、

桜色の閃光が罪歌のカウンターを防いだ。罪歌が再び構えなおしたが、

「ブレイズキャノン」

もう一人の魔導師の砲撃が迫った。罪歌はにやりと口元をゆがめ

ザシュ

砲撃を切ったのだ。マジでか？まあ、前にも俺の影を切ってたしな。
だが埒が明かないな。

その時、

「とっ」

クリスさんが罪歌の子供の媒体である、ナイフを投げつけたのだ。

罪歌は驚くまでもないといった様子でナイフを弾いた。だがそれだ

「詳しい事情が聞きたい。同行願おうか」

と、黒い服装の魔導師が杖を俺に向けて言った。

脅迫じゃないか、と一瞬思ったが捕まるといろいろ面倒なことになる。高町にもばれたく

はないしな。俺は、アムの方に首を向けた。アムは即座に黒い魔導師に向かって走り出した。黒い魔導師は、アムに向かって、何かを放とうとしたが、俺は即座に槍を魔導師の首に向け、構えた。そして携帯で、

「拒否します。知らない人についていくなど、母さんと同居人にも言われているんで」

と打ち、アムに跨った。36計逃げるにしかずと言われるように、俺は罪歌を回収して逃げようとしたが、視界に黒い魔導師の仲間らしい影が現れた。不幸だ。某幻想殺しの台詞を思い、俺はその場を離脱した。やばいな。罪歌どうしよう？

S i d e クロノ

逃げられた。仕方がない。残った二人に事情を聞くしかないな。残った二人の方を振り向くと、

「混沌こそは~~~~人間が~~~~」

とセンスのない歌を口ずさみながら去っていくこうとする赤毛の青年

がいた。

すぐさま背後にまわり、警告を放とうとしたが、
フオ

手刀が舞った。かろうじて避けられたものの、油断はできない。

「なんなのさ君？悪いけど、話すことは無いし、同僚探してるからね。遊んでる暇はないから」

「さっきの魔導師にも言ったのだがね。ここで何があったか説明していただきたい」

「さ〜〜ね、僕は同僚を探しにここに来ただけさ。それに何の権限があつて止めるのさ？いい加減にしないと・・・痛い目にあわすよ」

ぞくり、半端じゃない殺気だ。見たところ魔導師ではないが油断はできない。その時、

「ま、待っててください、訳なら、私が話しますから、その……」

小さな女の子が止めに入った。

「クロノ、その辺にいなさい」

「しかし提督」

「その人も事情があるみたいだし、帰してあげなさい」

「ちょっといいかな？」

「はい、なんでしょか？」

「僕が帰るってことは、そっちの子にいろいろ聞くんだよね？」

sideクリス

ちよつと困ったね。ただ、ファリンを探しに來ただけなのにこんなことになるとはね。普通に驚くよ、ヒューイの旦那なら興味深々だよ。流石に、今後のこと考えると関わりたくないけどね。

「そちらの子に今回の事情はお聞きしますが」

「君はそれでいいの？」

「あ、はい、大丈夫ですけど」

そうは言うけれど、この子一人って言うのもね。よし、

「今日はもう遅いしよ、明日にしない？小学生はもう帰る時間だしさ？」

「なにを、」

「明日にしてくれたら、いろいろ話すよ。僕自身のこととかね」

「わかりました」

「提督!!」

「クロノ執務管」

「！わかりました」

「じゃ、明日は土曜日だしね。君、集合場所はここで時間は何時がいいかい？」

「そうですね……午後の1時でいいでしょうか？あの、失礼ですがお名前伺ってもよろしいでしょうか？」

「クリス、クリストファー・シャルドレード。よろしく」

第5話 夜行ブレード5（後書き）

遅くなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1287/>

魔物語

2011年10月6日20時34分発行